

農作物技術情報 第5号 花き

発行日 平成23年 7月27日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 中央農業改良普及センター 県域普及グループ (電話 0197-68-4436)

携帯電話用 QR コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコンからは「<http://i-agri.net>」 携帯電話からは「<http://i-agri.net/agri/i/>」

- ◆ 病害虫防除・選別等の出荷調製を徹底し、良品販売に努めましょう
- ◆ 収穫後の翌年に向けた管理を徹底しましょう
- ◆ 小ぎくの翌年用の母株選抜を、収穫前に実施しましょう

1 りんどう

(1) 生育概況

露地栽培では一部を除き平年並みからやや早めの生育となっています。生育量では草丈不足が散見されます。

病害虫については特に目立った発生はなく、昨年大発生したリンドウホソハマキは今のところ抑えられています。しかしながら、今後の天候によっては多発する可能性もありますので要注意です。また、1年目圃場でのネキリムシによる被害が広範囲で確認されていますので同様に注意が必要です。降水量が少ないことからハダニ類の増加も懸念されます。

(2) 栽培管理

梅雨明け以降まとまった降雨量が少ないため、圃場が極端に乾燥すると蕾の発達が停滞しますので圃場の水分を維持するように畦間かん水等により土壌水分の管理に留意します。

また、本格的な収穫を控え、りんどうが倒れないようにフラワーネットの張りが充分か確認して下さい。

(3) 収穫・調製

気温が高い時期は収穫後の開花が進みやすいので、切り前を考慮します。また、しおれやすいので収穫後は直射日光下におかず、できるだけ早く涼しい場所に移動し、水揚げするなど適切に管理します。雨天時や朝露で葉が濡れている場合は、収穫後に扇風機や切り花乾燥機等を利用し葉や花を十分に乾かしてから箱詰めするようにします。

生産者間の規格や品質の差がないように出荷目揃い会等で出荷基準を再確認し、規格を遵守し出荷します。病害虫被害や曲がりの混入が無い事はもとより、老化した花の混入も避けるように選別調製します。

(4) 病害虫防除

病害は例年よりも発生が少なく経過していますが、葉枯病等の発生は散見されます。上位葉に発病しないように定期的に防除を行います。また、8月下旬(県北、山間地域)以降は花腐菌核病の防除開始時期となります。また、夏期の気象条件により発生時期が変動する場合がありますので適期防除に努めてください。

害虫については現在、特に目立った発生はありませんが、昨年、リンドウホソハマキが大発生したことから油断できません。また、定植圃場ではネキリムシによる被害が発生しています。

リンドウホソハマキは地域によってだらだらと発生が続いています。薬剤散布及び被害茎の折

取りを徹底します。また、定植株への被害も見られますので採花年株とあわせて継続して防除します。薬剤の選定、散布時期については各地域の防除ごよみや情報を参考にしてください。

ハダニ類も今のところ大きな発生には至っていませんが、高温・乾燥条件で多発しますので、発生初期の防除を心がけ、薬剤の選定、葉裏への十分な散布などを徹底し確実に防除します。

アザミウマ類は、着蕾期からの防除に加え圃場内外の雑草の処理を徹底します。また収穫後の残花での増殖が多いので、折り取り処分し防除します。さらに開花前に支柱を利用してシルバー反射テープを株周囲に張る事で、アザミウマの飛来が減少し発生密度を下げる事ができます。例年多発圃場では、薬剤散布と組み合わせての防除が効果的となります。

高温時の薬剤散布は、薬害が発生する危険が高くなりますので、早朝や夕方の比較的涼しい時間帯に散布することを徹底するほか、薬剤使用上の注意事項を再度確認して、適切な散布に努めて下さい。また、周辺作物への飛散する事のないように十分注意して下さい。

- (5) 収穫後管理：収穫後も病害虫防除を継続して茎葉を健全に保ち株養成に努めます。そのためには、収穫後の残花を折り取り、収穫前と同様にアブラムシ等の防除を継続します。また、収穫後には基本的にお礼肥を施用します。施肥量は窒素・カリ成分主体で3～5kg/10aを基準とします。



リンドウホソハマキ羽化孔

2 小ぎく

(1) 生育概況

7月下旬からの本格的な出荷が見込まれています。降水量が少ないことから各地で生育不足が見られます。害虫では、昨年大発生したオオタバコガやヨトウ類の発生が始まっています。

(2) 親株選抜（病害感染株の徹底排除）

株の状態の判断は収穫後では難しくなるため、必ず収穫前に選抜します。開花期が狙う時期に合っていること、草丈がよく伸び本来の品種特性を備え揃っていること、病害虫（特にウイルス、ウイロイド、土壤伝染性病害）に侵されていないこと等を確認して優良な株を選抜し、印をつけておきます。

キクえそ病(TSWV)や、わい化病（キクわい化ウイロイド）はウイロイド、ウイルスの感染によるもので、感染に気づかずに親株とすることで被害が拡大します。症状が見られる株の抜き捨てを徹底するとともに、症状が見えないものでも近隣に発症株があれば感染の可能性が高いので疑いのあるものは抜き取るようにします。感染率が高い品種は全てを廃棄し親株を更新することも必要です。

(3) 収穫・調製

出荷先に合わせた切り前とします。収穫後または選別をしながら水揚げを行います。雨天時の収穫の場合は、扇風機や切り花乾燥機を利用して葉と花の濡れを乾かします。

また、りんどうと同様に土壤水分が少ないと開花が進みにくいので、水分管理に留意します。

(4) 収穫後管理

収穫後は選抜した親株とする株については、マルチを除去し追肥や土寄せを行います。また病害虫防除も継続します。収穫後にも芽が伸びて開花しますが、適宜刈り込んで伸びすぎないように管理します。

(5) 病虫害防除

昨年大発生したオオタバコガやヨトウ類の被害が出始めています。特にオオタバコガについては昨年の反省から薬剤の選定、防除時期の見直しが行われていますので、各地域の防除ごよみや情報に併せて防除を徹底してください。

また、上記の害虫の他、白さび病やアブラムシ類、アザミウマ類、ハダニ類の防除を継続します。親株となるものに白さび病が感染していると翌年も発生する可能性が高くなりますので防除の徹底を図るとともに親株の選抜に留意してください。



オオタバコガによる蕾の食害

3 ストック

(1) 育苗管理

育苗中は気温上昇を避けるため、ハウスの出入り口やサイドをできるだけ開放します。徒長を防ぎ充実した苗とするため、遮光資材は育苗前半のみとしますが、徐々に光に馴らすために曇天時などに取り除きます。育苗中の乾燥は厳禁ですが、過かん水は徒長の原因になるので、生育状態をよく観察してかん水します。

(2) 八重鑑別

育苗中に2～3回に分けて八重鑑別を行います。生育を均一に揃えることが鑑別の前提となりますので、均一な覆土、かん水や温度管理に留意して生育を揃えるよう管理します。セル成型育苗で鑑別する場合、残す苗の根を傷めないようはさみで切り取って除去します。

(3) 定植

定植予定日に合わせ、圃場の準備を進めます。事前に十分かん水し、遮光資材を張ってあらかじめ地温を下げます。

定植適期は本葉3～4枚の頃です。定植直後にかん水した後は、4～5日間はかん水をせずに活着を進めます。その後は2～3日おきに十分かん水します。最初に根を深く張り、後半にかん水を控えても萎れないような株を作ります。また長期間の遮光は避け、定植後10日程度で除去します。

(4) コナガ防除

定植時に殺虫剤（粒剤）を施用します。生育中は殺虫剤を散布しますが、薬剤耐性害虫の発生を避けるため異なる系統の剤のローテーション使用を心がけてください。ハウスの開口部を防虫ネットで塞ぐことも効果的ですが、この場合は通気性の確保に留意してください。

次号は8月25日（木）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。

熱中症防止

- 日中の気温の高い時間帯を外して作業を行うとともに、休憩をこまめにとり、作業時間を短くする等作業時間の工夫を行うこと。水分をこまめに摂取し、汗で失われた水分を十分に補給すること。気温が著しく高くなりやすいハウス等の施設内での作業中については、特に注意。
- 帽子の着用や、汗を発散しやすい服装をすること。作業場所には日よけを設ける等できるだけ日陰で作業するように努めること。
- 屋内では遮光や断熱材の施工等により、作業施設内の温度が著しく上がらないようにするとともに、風通しをよくし、室内の換気に努めること。作業施設内に熱源がある場合には、熱源と作業者との間隔を空けるか断熱材で隔離し、加熱された空気は屋外に排気すること。

6月1日～8月31日は
農薬危害防止運動期間です

- 近隣住民・周辺環境に配慮しましょう
- 農薬散布準備、作業中・後の事故に注意しましょう
- 農薬の保管・管理は適切にしましょう